

平成二十六年十月十日発行  
皇學館論叢第四十七卷第五号 抜刷

# 高野山と丹生・高野両明神

——縁起と伝承の世界(上)——

藤  
井  
豊  
久

# 高野山と丹生・高野両明神

——縁起と伝承の世界(上)——

藤井豊久

## □ 要 旨

丹生都比売神社に祀られる丹生高野両明神は、空海が高野山を開く際の地主神であり、広大な神領を寄進して、高野山の守護神になったと云われているが、本来、両明神は別々な神である。高野明神は空海が高野山に入部した際に交渉を持った地主神であり、丹生明神は高野山の山下に存在する在来の神であった。

高野山が荘園領主として荘園の獲得にのりだすと、丹生明神を積極的に抱え込む動きを示す。それは丹生明神の「告文」や「氏文」に記された神領が大いに活用され、その内容も高野山に有利に働く様に書き換えられていった。この抱え込みを利用されたのが高野明神である。両明神は親子関係で結ばれ、「丹生高野両明神」として、丹生明神の遷座当初よりの関係と描きだされる。

丹生都比売神社の側にとっても高野山との関係深化は大きな利点が存在した。中央に大きなパイプを持つ高野山を媒介に位階を上げ、発展していったのである。

## □ キーワード

丹生高野両明神 地主神 空海 縁起 荘園の獲得

## 目次

はじめに

一、修行縁起と今昔物語

二、先行論文の成果

三、丹生都比売神と丹生酒殿神社

四、丹生都比売神社（天野社）

（以上、本号）

五、高野明神

（以下、次号）

六、丹生都比売命と高野明神

おわりに―地主神について―

## はじめに

寺社建立の縁起には、よく地主神との交渉譚が語られている。地主神が高僧に土地を譲渡して仏法の興隆に助力するという、護法善神思想で語られることが多く、その典型的な例としては、天台宗無動寺の相応和尚と葛川の地主神志子淵神との交渉譚である<sup>(1)</sup>。その他、具体的に譲渡説話が語られず、いろいろ装飾されていて、東寺の稻荷明神、比叡山の日吉神社<sup>(3)</sup>、長谷寺の瀧倉神社など、地主神と大寺院との関係は、本来は同様の構造をもつものと思われる<sup>(2)</sup>。葛川の地主神である志子淵神と相応和尚のように、神域を譲与する話が詳細に語られている縁起はあまり多くはないが、高野山の地主神である丹生都比売神の説話は『御手印縁起』や空海伝などで、高野山開創に関わる弘法大師空

海と地主神との交渉譚が非常に詳しく語られている。両者に共通する環境は、背後に堺相論が存在し、領域の正統性をアピールする必要性があったことが考えられる。そこには不可思議な靈験談を語る縁起類と現実離れた説話に彩られた世界が展開し、相論を有利に進めるために、後世に作成された偽文書も存在し、史実を覆い隠してしまっていることもある。ただそれらが事実無根の上に構築されるのではなく、事実の上に構築され、拡大発展したものと考えれば、史実を把む糸口になると思われるのである。

高野山の場合、空海に仮託された遺告類や文書、地主神と空海の交渉譚、地元の伝承など様々な逸話が語られている。また高野山に特徴的なことは、地主神との交渉譚に丹生大明神と高野大明神の二柱の神が登場することである。他の例を見ると、複数の地主神は登場することは稀である。寺地の確保だけならば、何も二柱の地主神を登場させる必要はないからである。何故に高野山と地主神の交渉譚には二柱の地主神が登場するのか、その理由を歴史的背景とあわせて考えてみたい。

### 一、修行縁起と今昔物語

空海と丹生神の交渉譚を、当時の貴族社会に広く知れ渡らせたのは、おそらく『今昔物語』の説話であろう。『今昔物語』の「弘法大師、始建高野山語第二十五」を示してみると（便宜、カタカナをひらがなに直した）、

弘仁七年と云ふ年の六月に、王城を出て尋ぬるに、大和国、宇智の郡に至て、一人の獵の人に会ぬ。其形、面赤くして長八尺計也、青き色の小袖を着せり、骨高く筋太し。弓箭を以て身帯せり。大小二の黒き犬を具せり、即ち、此人大師を見て、過ぎ通るに云く、「何ぞの聖人の行き給ふぞ」と。大師の宣はく、「我れ唐にして三鉈を擲て、「禪

定の靈穴に落よ」と誓ひき。今其所を求め行く也」と。獵者の云く、「我れは是南山の犬飼也。我れ其所を知れり。速に可教奉し」と云て、犬を放て令走る間、犬失ぬ。

大師、其より紀伊の国の堺、大河の辺に宿しぬ。此に一人の山人に会ぬ。大師此事を問給ふに、「此より南に平原の沢有り。是其所也」。明る朝に、山人、大師に相具して行く間、蜜に語て云く、「我れ此山の王也、速に此の領地を可奉し」と。山の中に百町許入ぬ。山の中は直しく鉢を臥たる如くにて、廻に峯八立て登れり、松の云む方無く大なる、竹の様にて生並たり。其中に一の松の中に大なる竹股有り。此の三鉛被打立たり。是を見るに、喜び悲ぶ事無限し。「是、禪定の靈囀也」と知ぬ。「此の山人は誰人ぞ」と問給へば、「丹生の明神となむ申す」。今の天野の宮、是也。「犬飼をば高野の明神となむ申す」と云て、失ぬ。<sup>5)</sup>

(後略)

この説話は、空海が唐からの帰路、船上から三鉛を投じ、その着地した場所に一寺を建立せんと念じ、高野山に金剛峯寺を開創するという有名な話である。その三鉛を採す途次に南山の獵人(高野明神)と山民(丹生明神)に出会い、三鉛の場所と広大な神域を譲与されるのである。

この話の展開は、白井優子氏が指摘するように、空海が会おう獵人と山人の二人が三鉛の存在場所を教えるという話が「並行」して掲載されている。<sup>6)</sup> この説話は、もともと独立した獵人と空海が会おう話と山民に出会う話が結び付けられて展開しているように感ぜられるのである。すなわち金剛峯寺を建立する際の、空海と寺地になる高野山の地主神との交渉と、高野山が寺領を確保し、莊園経営を展開する際の丹生社との交渉を描く二つの説話から構成されているのである。

『今昔物語』の空海の説話は、『金剛峯寺建立修行縁起』(以降、『修行縁起』と略す)をベースに書かれていること

が指摘されている。<sup>(7)</sup>『修行縁起』の話の展開も、『今昔物語』の「弘法大師、始建高野山語」の話も丹生・高野両明神の項はほぼ同じ展開になっている。両者の大きな違いは『修行縁起』では丹生明神が空海に譲与する神領の四至を掲げているのに対し、『今昔物語』では四至は明示されることなく、空海の入定伝説に移っている。この違いは高野山側で書かれた『修行縁起』が高野山の領域の正統性をアピールする意図が込められているのに対し、『今昔物語』は、読者層の関心に合わせて、空海の入定伝説に移行するという編者の意向が背景にあるものと思われる。高野山にとって、丹生明神により、その神域が譲渡されたという説話を社会にアピールすることが大きな課題として存在していることを示している。

## 二、先行論文の成果

高野山に関する研究は、『御手印縁起』や遺告類、空海伝記の研究、神仏習合、本地垂迹説の研究、荘園の研究、それに関連した在地領主制の研究など多方面にわたり、膨大な研究成果が残されている。その中で、ここで取りあげる丹生都比売神と高野神に関する研究は、空海の伝記類の整理、空海に仮託された遺告類や『御手印縁起』の制作年代に関連して、多くの研究成果が残されている。これら伝記類、遺告類の文献の分析を中心とする研究の中で、祭礼、祝詞、伝承、現地調査などからの研究も存在する。

ここではそれらの研究の中で、本稿に関連する高野山の地主神である丹生高野両明神を著した先行論文を中心に整理してみた。

まず取り上げられるのが『紀伊統風土記』（以降『統風土記』と略す）である。この著書は江戸時代の地誌類であり、

個人の研究書というよりも編纂物であるが、丹生都比売神社（天野社）について、多くの頁を割き言及しており、<sup>8)</sup> 多く史料や在地の伝承を掲げ、古今の宗教家や国学者などが解釈した種々の縁起類や神書を紹介しているので、百家争鳴の態をなしており、随所に著される編者の解釈も齟齬が見られるが、参考にすべきものが多い。

まず降臨の地に『丹生大明神告門』（以降、『告門』と略す）を掲げ、「紀伊国伊都郡奄田村乃石口爾天降坐天大御名乎申波恐之不申波恐支伊佐奈支伊佐奈美乃命乃御兒天乃御蔭日乃御蔭丹生津比咩乃大御神登大御名乎顕給」との祝詞から「丹生津姫は伊邪那岐伊邪那美命の御子たること顕著なり」と丹生都比売命を天孫系の列に加えている。更に最初の降臨の地である「伊都郡奄田村乃石口」を降臨の伝承を持つ三谷村酒殿神社に比定している。（「天野荘上天野村」の項）  
降臨の経緯は、和歌浦の玉津島に鎮座する天照大神の妹稚日女尊が『播磨国風土記』に語られた神功皇后の新羅遠征に功があり、その論功行賞として伊都郡丹生川上の管川（筒香）藤代峰を賜い、そこに遷座したという。<sup>9)</sup> ここで『播磨国風土記』の逸話に登場する「爾保都比売命」は丹生都比売命であり稚日女尊と同体である。しかし先座の玉津島にも未練があり、玉津島に残る神と藤代峰に遷座する神の「一神両所」となる。藤代に遷った神が丹生都比売神となる。その後、処々に遷行し、最終的に現在の天野の地に鎮座する。天野社で毎年九月十六日に行われる神輿の玉津島遷幸の「浜降り神事」はその名残である。（「天野荘上天野村」の項）

丹生都比売神社を祭祀する丹生氏の出自は、丹生祝氏の系譜である『丹生祝氏文』<sup>10)</sup>（以降、『氏文』と略す）より、紀伊国造家紀氏の同族であり、豊耳命の時に、国主神の「女阿牟田刀自」を娶り、その子「小牟久君」から大丹生直、丹生祝、丹生相見が出て丹生高野両明神を祀る丹生家が生まれる。「阿牟田」は「奄田」であり、現在の九度山町慈尊院周辺の古名であり、「小牟久」は紀ノ川を挟んで北側の「神野村」の地域を比定している。（「天野荘上天野村」の項）  
高野明神は高野山に鎮座する地主神であり、天野祝の祭祀するところであった。応神天皇の御世に丹生明神が天野

の地に鎮座した際に同所に遷座して合祀されたので、「丹生高野御子神」と呼ばれるようになった。（「天野荘上天野村」の項）高野明神は狩場明神と団体とするがそれぞれ別の神である。狩場明神は弘法大師の道案内をした獵師を神として祀ったものであり、弘法大師と同時代の神である。高野明神は「神世」の昔より高野山に鎮座する神である。両神が混同されたのは弘法大師が高野山を訪れた事実を「神霊」化するために、高野明神が獵師と化して導いたという話を説いたことから、狩場明神と混同されたのである。（「三谷荘皮張村」の項）

以上が『続風土記』の丹生高野両明神に関する解釈を整理したものである。前近代という限界を持ちながらも、その研究成果は十分に傾聴する価値を有している。

次に戦後に発表された研究成果をみてみたい。史料の関係上、民俗学的な研究成果が中心になるが、4つに分類し整理してみたい。

### ①、水神的性格

柴田実氏<sup>①</sup>は、現地調査を踏まえ、丹生都比売神社の存在する天野の地はそれぞれ沢に沿って作られる垣内集落によって形成されており、その中でも奥ノ沢、中ノ沢、柳ノ沢は天野集落の始源に遡り、天野で初めて水田が開かれた水の神を祀った沢の神であると指摘する。また丹生都比売命が最初に降臨したとされる「伊都郡奄田村石口」は今の丹生酒殿神社の場所であり、横に流れる沢の「石口滝」に降臨したという伝承を持ち、奄田（アムタ）は訓読すれば、「イホリダ」であり、諸方に存在する「イヘダ」に通じ、「土地を開いた家が、その祖霊でもあり、田の神でもあるもの」をまつるために、山から流れ出る最も清浄な水によって作る田」のことを示している。これらから丹生都比売命の神格を田の神、稲霊と推測している。

門屋温氏は、初期の伝記『空海僧都伝』に沢地に棲む荒ぶる障碍神として登場することを重視し、天野社の周辺には「柳沢、奥沢、中沢（南沢）」が存在し、正月などの祭礼には奉幣が行われることから、「沢地の神」としてのニフツヒメを指摘している。

五来重氏は、『氏文』に載せられる四至が、十津川の水源、有田川の水源、紀ノ川（吉野川）支流の丹生川天野川の水源にあたる山地を画定していることから、もともとの丹生都比売命は、これらの山神であるとともに、水神（水神）でもあった。水神は女神であることが多く、丹生都比神（女神）と高野神（男神）は本来「丹生津比売高野大明神」として、一柱の神であり、説話に登場する狩人は神の司祭者であると推定。原初的な水懸り村落の山神水神信仰と山岳地帯をテリトリーとする山伏の山岳信仰を想定している。

丹生都比売命の水神としての性格は『統風土記』の編者も一つの説として紹介している。丹生の約めたものが「淳」であり、水の湛えた場所を言い、「沼」も同じ意であるという。谷や河川の場合に丹生という地名が多く見られ、「津」は「乃」という助詞であり、丹生都比売は水の水神と解釈できるといのである。（「天野社之上」の項）

## ②、水銀の女神としての性格

松田寿男氏は『丹生の研究』<sup>14</sup>で、「丹生」という地名が「丹すなわち朱砂（硫化水銀）の産出を意味」しており、それらの地名は古代の水銀鉱業の痕跡を示していると指摘し、ニウツヒメ（丹生都比売）は朱砂の産出を支配する女神であるとする。またこの朱砂の採掘に従事した民が「丹生氏」であるとして、全国の「丹生」地名や丹生神社を調査、同時に鉱掘跡や土の水銀の含有量も調べて論を補強している。高野山の地主神丹生都比売神社についても、水銀鉱床が分布する中央構造線周辺に位置しており、それを裏付けている。

注目されるのは、古代の朱砂採掘は技術的に脆弱で、そのためにすぐに廃鉱になることが多く、祭神のニウヅヒメもその神格を変えたり、合祀や消滅する途をたどる。その代表例として、高野山の地主神丹生都比売神社と大和丹生川上神社を掲げている。

高野山の地主神丹生都比売神社は、本来の高野山の地主神である高野明神との合祀という形をとり、丹生高野明神として、高野山金剛峯寺の勢力下にはいり、紀伊一國に勢力を張っている。ここではニウヅヒメは消滅せず、高野山によって神格を護持している。これを「紀伊系変化」としている。これに対し、大和丹生川上神社の本来の祭神は、『日本書紀』卷三「神武天皇紀」に記載された丹生川上神社の起源にでてくる「水無し飴」＝アマルガムを掌るニウヅヒメであったが、そのニウヅヒメが忘れ去られ、これに代わって合祀されていた水の女神ミズハノメが前面に出てくる。更に平安前期には雨師のオカミが加わったと推定し、これを「大和系変化」としている。

松田氏の説を全面的に受け入れ発展させたのが田中久夫氏と俵谷和子氏である。田中久夫氏は、都から遠く離れた南海の熊野や高野山が何故に宗教の一大中心地となり得たのかという視点から、その背後に豊富な鉱物資源の存在を指摘している。空海が点定した高野山には天野、筒香を本拠地とする真朱採掘集団の丹生氏が存在しており、空海の入山には丹生氏の援助があったとし、『今昔物語』の高野山開創説話は空海と丹生氏の交渉を語ったものであるとする。

さらに俵谷和子氏は松田寿男氏や田中久夫氏の研究成果に立脚し、多くの造寺造仏事業を行っていた藤原道長の高野山参詣を、単に宗教的発心だけではなく、その事業に必要な多量の水銀への関心があったと指摘し、高野山が朱砂の鉱床の上に立地していることから、空海の高野山入山の動機も修行の地の点定という理由ばかりではなく、造寺造仏に必要な丹生の産出地に着目したのではないかとする。また空海と丹生氏との関係は、水銀の需要供給の関係に

あつたと指摘している。

松田氏の論は文献史料のみならず、全国の「丹生」地名や遺構から丹生都比売命の性格を規定しており、説得力のあるものである。ただ氏は、古代の採掘技術は脆弱で廃坑にともない、神格を変えたり、合祀や消滅したりすることも指摘している。高野山の地主神丹生都比売命は神格を変えた典型的な例として掲げているのである。

俵谷氏は空海や藤原道長が高野山地域の水銀生産に着目したのではないかと指摘しているが、高野山が、道長や空海などの中央貴族が着目し、食指を動かすほどの著名な水銀の産地であれば、当時の水銀に関連した史料に出てきたり、現地の伝承や遺跡に何かの形で残っているものと思われるが、それらを認めることができないということは、少なくとも平安期には、高野山周辺は水銀の産地ではなかったと思われる。

### ③、国造紀氏の祭神

岡田莊司氏<sup>18)</sup>は、空海伝記や遺告の文献史料のみならず、祭礼や祝詞などは原初の形態を踏襲し後世に伝えられているとして、それらを豊富に史料として使い丹生都比売神の性格を分析している。

丹生都比売命は国造家の紀氏に奉斎されて、まず和歌の浦の玉津島に上陸して、更に紀ノ川を遡り、伊都郡菴田に鎮座する。この地が現在の丹生酒殿社である。『氏文』に見える紀国造家の豊耳命と国主神の女阿牟田刀自の婚姻は、紀ノ川を遡上し内陸部に勢力を拡大しようとする紀氏と伊都郡菴田を拠点とする在地豪族阿牟田（菴田）氏の婚姻関係に他ならない。

高野明神はもともと天野地域一帯の土着の地主神であり、本来はこの地域を獵場とする狩獵民によって祀られていた神である。それが丹生都比売命の入部により合祀されたものである。

天野の丹生都比売神社は、原祭祀の狩猟信仰に海神的神格を持つ丹生明神が入り込み形作られたものである。それが農耕文化の発展によりそれらの神格が薄れ、水神、農耕神的人格に変化してきたものである。

武内孝善氏は「高野雑筆集巻上」<sup>(19)</sup>に掲載された空海書簡の差出年と宛名の考証から、この空海書簡の宛は従来の三説(国司、国造家、大伴氏)にたいして、高野山山下の丹生都比売命を奉斎する天野の丹生氏に、高野山開創に助力を依頼した書簡であるとして、丹生氏と空海の当初からの交流を指摘している。

#### ④、その他

和多昭夫氏は<sup>(21)</sup>、空海の敬白文を分析し、丹生高野両明神の名が一切掲げられていないことを指摘し、空海と両明神との交渉はなかったとしている。但し「山上に山神を祀る何らかの民俗」の存在はあったとし、一般的な民俗慣行としての「高野山王」を認めており、この「高野山王」が丹生明神と結びつき、地主神の丹生高野両明神として前面に登場するのは、高野山が領域支配に意欲を示しだす過程で形成されたものであるとする。

### 三、丹生都比売神と丹生酒殿神社

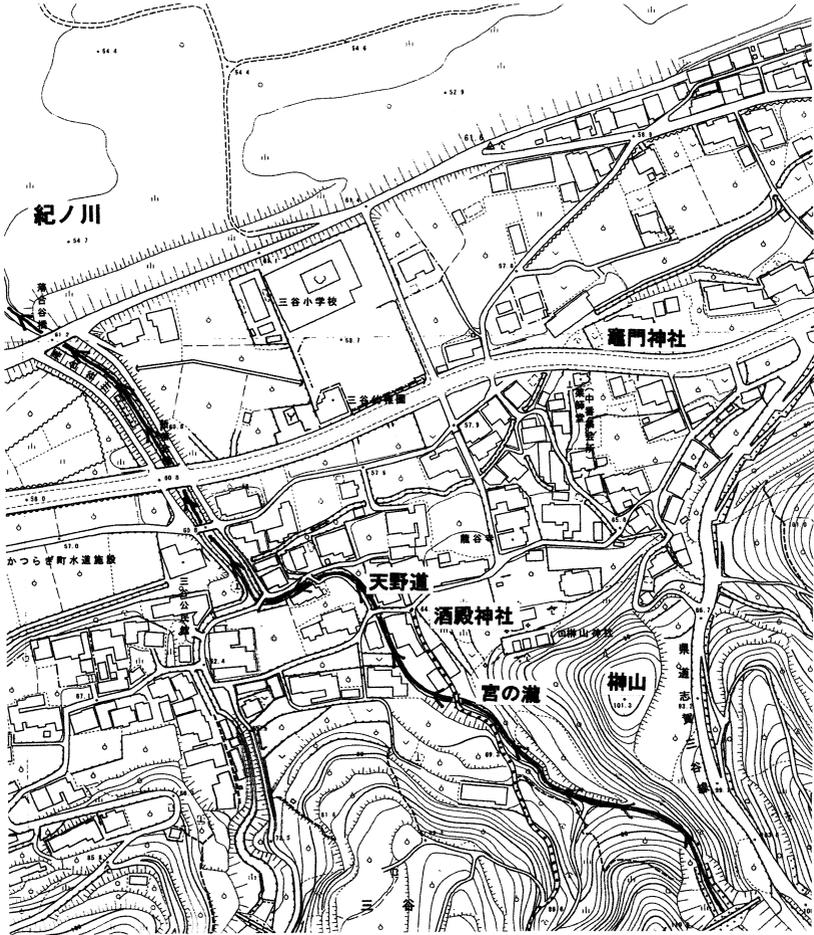
『続風土記』が記述するように、丹生都比売命の降臨については丹生酒殿神社の地と「藤代峯」の双方がある。丹生酒殿神社については、文暦元年(二三四)の「丹生友家紛失状」に丹生酒殿神社の地が「丹生大明神根本垂跡之地」<sup>(22)</sup>とあり、鎌倉時代初期には丹生都比売命の最初の降臨地として認識されていたことがわかる。『告門』にも「紀伊国伊都郡奄太ノ村乃石口二天降坐天」<sup>(23)</sup>とあり、丹生酒殿神社の地が最初の降臨地であることは動かしがたい事実として

存在していたのである。

では『播磨国風土記』の記す「爾保都比売」の賜わった「藤代峯」との関係性は如何なるものであろうか。『告門』には石口に降臨した後、巡行の地として掲げられた二十余の地名の最初に記されているのが「丹生川上水分峯」である。この「丹生川上水分峯」を『続風土記』は「川上は大和国吉野郡丹生川の川上なり」として、吉野郡下市町の丹生川を想定している。また谷口正信氏は丹生川上神社の存在する「吉野郡丹生川上村」（東吉野村）を比定地にして<sup>(26)</sup>いる。それに対し、久保田収氏は「伊都郡筒香村水呑峠」を充てている。『播磨国風土記』の逸話との関係性を考えれば久保田氏の説が妥当といえる。すなわち論功行賞として賜った「藤代峯」に向けて、紀ノ川を遡上する途次に「奄太村石口」に鎮座したと理解できるのである。

現在の丹生酒殿神社の祭神は丹生都比売命、高野御子神、誉田別尊であるが、『続風土記』には本社である丹生明神、撰社の狩場明神、それに神息である十二王子神が祀られている。立地は沢（奥山谷川）が山より紀ノ川に流れ込み、小扇状地を形成するその扇頂部にあたる。（図Ⅰ参照）酒殿神社の背後には、崇神天皇の御代に「大和丹生川上」より榊を持って丹生明神が降臨したという伝説を持つ、お椀をかぶせたような形をした「榊山」が存在する。酒殿神社を礼拝すれば、「榊山」を拝むことにもなり、もともとは「榊山」が御神体であったのではないかと思われる。この「榊山」の地主神が酒殿神社の北側下方にある「竈門明神」である。<sup>(28)</sup>現在、「竈門明神」は「竈門屋敷」の屋敷地内にあたる屋敷的な存在であるが、もともとはこの地域一帯の地主神であったと思われる。

三谷酒殿社の立地場所は、先に述べたように、沢が紀ノ川に流れ込む小扇状地状の扇頂部にあたる。こうした地域は、用排水が容易な立地条件を備え、早くから開かれ水田化されることが多い。横を流れる沢の上流にはかつて「七尋瀧」があり、その滝が最初の降臨地であるという伝説も<sup>(29)</sup>ある。いずれにせよ丹生都比売命は、水源となる沢に着眼



→は流路      ——は天野道

図 I. 酒殿神社周辺図

して、竈門明神を奉斎する集団によってすでに開かれていた地域の、その根幹部に降臨したのである。

紀伊国造家豊耳命と国主神の女阿牟田刀自の婚姻から、丹生明神を司る丹生祝と丹生相見などの丹生一族が出てくるといふ由来を考えれば、国主神は土着神である竈門明神を奉賽する菴田の在地豪族であり、丹生明神は国造家豊耳命の奉賽する外来神であり、丹生明神が神山に降臨し、地主神である竈門明神がそれに仕えたという神話は、両者の婚姻関係の宗教的表現に他ならない。

#### 四、丹生都比売神社（天野社）

酒殿神社の西側、沢に沿って「天野道」が登っている。この道は「勅使道」であるとか、丹生都比売神社の神主がまだ三谷の里に居住していたころに通った道であるという伝承を持っている。

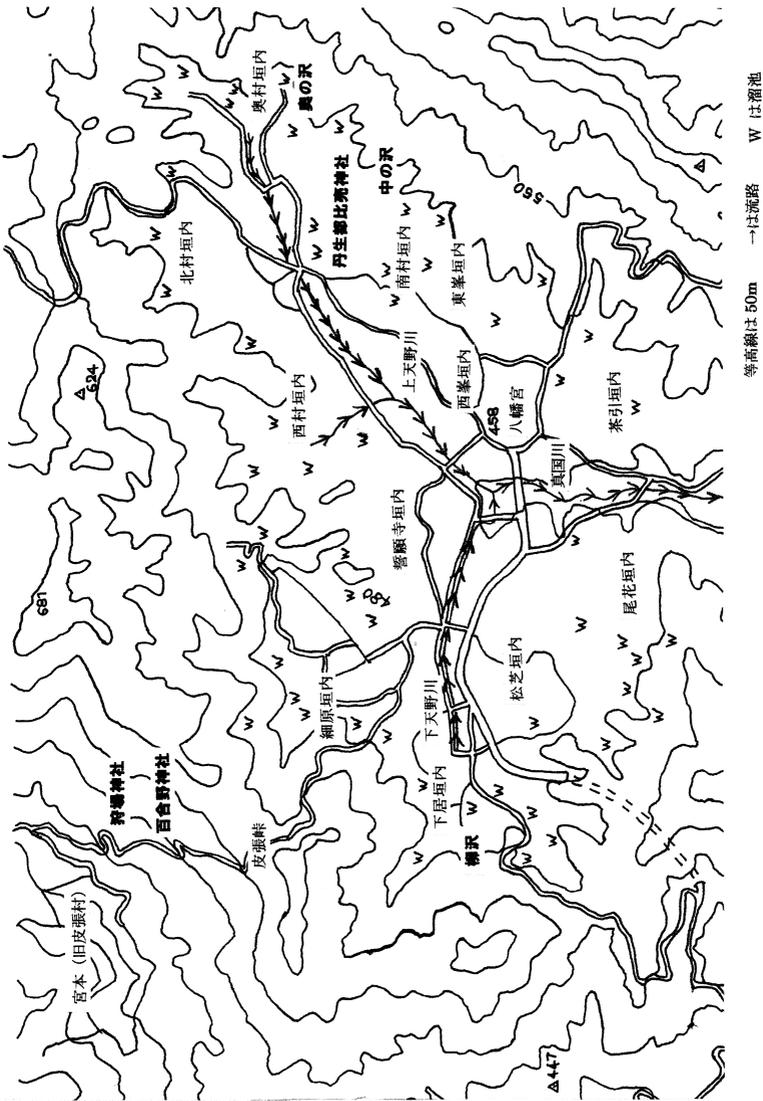
「天野道」を登りきると平坦な盆地が開け、「天野原」と呼ばれる平地に出る。中央に上下の天野川が縦断し、川に流れ込む沢ごとに垣内集落が点在する景観は、かつて柴田実氏が調査された景観と変わらない。それぞれの沢には溜池が築造されている。（図Ⅱ参照）天野には随所に溜池が点在しており、標高四五〇米ほどの天野原では、沢水をまず集めて水を確保し、それを温めて田に利用するという方法がとられているのであろう。この地域の上端部に天野原全体を俯瞰する形で丹生都比売神社が鎮座している。

丹生都比売神社の恒例祭祀に、

（正月元日）  
同日七時荒神社 奥の沢 中の沢

右三箇所御供献す

惣神主社家一人随  
ひ社参祝詞奉幣す



図II. 天野地区周辺図

柳沢大神 皮張大神 百合野大神

此三箇所に御供を献す 尤定日なく十六日<sup>(30)</sup>  
迄の内社参式あり

とあり年頭には六社への社参を行つてゐる。中でも「荒神社、奥沢、中の沢」の三社については必ず元旦に祝詞奉幣の神事を行つており、特別な三社であることが分かる。

「荒神社」は『続風土記』の「諸堂舎付旧跡」に、

地鎮祭所

同社 傍三尺四方塚あり毎年二月十三夜木祭後宮仕来て榊注連樹るを地祭<sup>(31)</sup>  
云に地鎮社在于本丑寅二尺四方有千木齧木御拜鳥居いへは上の荒神社ならん

とあり、「荒神社」は丹生都比売命が天野に入部した際の地の神、すなわち地主神である。二月の大祭には、十三日に「地鎮の御祭と号して御榊二本に曳注を張り宮仕是を以て荒神の傍の芝に立て地鎮祭の所作」が行われる。『続風土記』はこの所作を「按ずるに此木祭は神木祭にて大明神初て天降り給ふ時所々に忌杖を刺給ふことの遺風を此大御神の広前にて流習して年ごとに此神事を為しけること、思はる」と、<sup>(32)</sup>『告門』に記された丹生都比売命の各地巡行の所作と理解しているが、この所作は丹生都比売命が天野に鎮座する際に地神より土地を譲渡してもらふ神事と理解すべきであろう。

同様に「奥の沢」「中の沢」も丹生都比売命の天野入部当初から存在した沢神であると思われる。両神は丹生都比売神社の両脇に鎮座し、現在では休耕田になり、荒れているが、かつては他の沢同様に溜池に水を湛え、上天野川にそそいでいたのであろう。柴田実氏が指摘するように、おそらくこの両沢田は天野の地で最初に開かれた由緒ある田であると思われる。

「柳沢大神、皮張大神、百合野大神」の三神については、柳沢大神（柳沢明神）は丹生明神が降臨した場所であるとか、狩場明神の仲介で丹生明神と空海が出会った場所<sup>(33)</sup>であるという伝承を持ち、皮張大神（皮張明神）は後述する

ように、狩場明神のことであり、百合野大神（百合野明神）は狩場明神の廟所であるという伝承を持っている。これら三神は狩場明神に関する遺跡であるといえる。狩場明神は高野山中で空海と出会った高野明神のことであると認識されており、空海伝説がまわりついている。柳沢明神については空海と狩場明神の伝説が語られているが、下居垣内の谷戸神であり、狩獵の神ではない。前述の奥の沢、中の沢とあわせて「天野三沢」と称されているが、天野を縦断する川は、図Ⅱで示したように上天野から西に流れる川と、下天野を東に流れる川が、天野の鎮守である八幡社付近で合流し、真国川になり南に流れている。奥の沢と中の沢は上天野の水系であり、柳沢は下天野の水系であり水系を異にする。おそらく柳沢は下天野川の水系でもっとも早く開かれ、丹生明神の入部時にはすでに谷戸田が開かれていたものと思われる。丹生都比売明神の影向の地であるという伝承もあるので、柳沢明神も当初より開かれた谷戸神として、特別視されていたのではないかと思われる。

皮張明神は十二王子の<sup>34</sup>一として、丹生都比売神社の長宮の中に祀られている。十二王子は丹生都比売命の神息として、三柱ずつ四方を護り、さらに百二十伴神がそれぞれ三十柱ずつ四方に配置され、毎月日別に高野山の結界を鎮護するという三十番神思想に支えられているが、この構想は平安時代の本地垂迹思想の進展の中から形作られてきたものである。現在、在地に皮張明神と称する祠は存在していない。皮張村（宮本地内）から下天野に抜ける峠に狩場明神が祀られており、『統風土記』には「丹生狩場明神社」が記載され、応神天皇が丹生明神に神地を寄進した際に、同時に犬飼を寄進し、その犬飼の子孫である狩人が白黒の犬を伴い、空海を高野山に案内したという故事を紹介している。<sup>35</sup>この故事は『氏文』に書かれている故事と空海伝説を結びつけて作られたものである。ところが『紀伊国名所図会』には「皮張明神社」と記載され、その祭神は「丹生明神、狩場明神」、「皮張明神又狩場明神と称す」とあり、「応神天皇の御宇勅ありて、備前国御野郡より本国に來り、此の地に居住して数世、麋鹿を獵て丹生明神に供ずるを

職とす、明神の世にあたりて田獵の途中、弘法大師に逢て高野山の地に導引す<sup>(36)</sup>と、ほぼ『統風土記』と同様の故事を載せている。狩場明神は、もともとは村名を冠した土着の「皮張明神」で、丹生明神の入部当初より存在していたと思われる。狩場明神は高野明神として鎌倉時代以降、幾度となく神画像に描かれている。狩場明神が高野明神であるならば、丹生都比売命の第一子であり、皮張明神はそれに続く神息十二王子の一である。ところが皮張明神は狩場明神であり、狩場明神は高野明神であると云う混乱は、高野明神が空海を高野山に導くという説話の中で、山中で獵犬を連れた獵人姿をして現れることから、高野明神が獵人であると認識され、さらに高野山と丹生都比売神社の関係強化という歴史的背景の中で、皮張明神、狩場明神、高野明神の三神が付会、発展していったのであろう。時代の変化の中で「皮張明神」という呼称は次第に後退し、祭祀の次第や一部在地のみに残ったといえる。

注目したいのは、『日本書紀』の神功皇后紀にすでに「天野祝」<sup>(37)</sup>が登場し、天野の地での丹生明神鎮座の古さを物語っているが、この地域に縄文から奈良時代にかけての生活痕を示す遺跡が見つからないということである<sup>(38)</sup>。ということとは、天野原の本格的な開発は比較的新しく、村落景観が沢ごとくに形成される垣内集落に求められるとすれば、律令体制の崩壊にともなって、山間部に新開地を求める農民的開発がその原点であろう<sup>(39)</sup>。それに着目して本格的に天野原の開拓に乗り出したのが丹生明神である。それはすでに存在する奥の沢、中の沢、柳沢に開かれた谷戸田を囲い込む形で展開されたのである。『空海僧都伝』に「路辺有<sup>(40)</sup>二女神」、名曰<sup>(41)</sup>「丹生津媛」、其社廻有<sup>(42)</sup>三十頃計沢」とか「冀献<sup>(43)</sup>私苑」、表以<sup>(44)</sup>三信情」、今見開田二三町許、名常庄是也」とあるのは、伝記が単に空想の産物ではなく、当時の実状を反映して描かれているといえる。

狩場明神（皮張明神）については、明神が狩りをして得た獲物を調理した「魚板測」や狩りの最中に魔物に襲われる「まと測」の話など、狩りに関する伝説が残っている。これらは天野原地域が当初より谷戸田を中心とした農業集

落ばかりでなく、狩猟民を含んだ多様な成業で成立する村落であったことを物語っている。

(以下、次号)

(注)

(一)、近江国葛川は比叡山無動寺領であり、相応和尚が天台修験の道場として葛川明王院を開いた際に、葛川の地主神の志古淵神によつて葛川の地を寄進される。その経緯は『葛川縁起』(『続群書類従』第二十八輯上 続群書類従刊行会 一九五八)に描かれている。

又一老翁忽現对<sub>二</sub>和尚<sub>一</sub>蹲距同不<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>動身<sub>一</sub>、過七日以<sub>二</sub>第八日<sub>一</sub>和尚問<sub>二</sub>化人<sub>一</sub>云、如<sub>レ</sub>形為<sub>レ</sub>体是何人乎、而化人返問云、誰人此深谷清滝地、未<sub>二</sub>曾凡夫來臨<sub>一</sub>、汝何故來住乎、和尚答曰、我此天台山慈覚門弟也、欲<sub>レ</sub>拜<sub>二</sub>生身不動明王<sub>一</sub>所<sub>二</sub>修行來<sub>一</sub>也、于<sub>レ</sub>時化人歎云、貴哉々々、我是自<sub>二</sub>劫初<sub>一</sub>成<sub>下</sub>未<sub>レ</sub>惣<sub>二</sub>領<sub>一</sub>三界<sub>一</sub>別<sub>中</sub>領此<sub>上</sub>御<sub>上</sub>、于<sub>レ</sub>今未暫時、而別領地内有<sub>二</sub>二十九清滝七流清川<sub>一</sub>、限<sub>レ</sub>東比良峯、南黄之滝南行一里花折谷、西駈籠谷鎌鞍峯、北右淵瀨矣、此内自<sub>レ</sub>曾全無<sub>レ</sub>來<sub>二</sub>臨者<sub>一</sub>、而聖人是大聖明王後身也、仍為<sub>二</sub>此山領主<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>之為<sub>二</sub>弘法修行靈験勝地及慈尊出世<sub>一</sub>、当今修<sub>二</sub>大菩提行<sub>一</sub>、此滝者は十九之中第三清滝、通<sub>二</sub>都率内院<sub>一</sub>、名曰<sub>二</sub>葛川滝<sub>一</sub>、自今以後我誓守<sub>二</sub>弘法修行者<sub>一</sub>、及<sub>二</sub>于<sub>レ</sub>弥勒下生曉<sub>一</sub>將<sub>レ</sub>護<sub>二</sub>弘法<sub>一</sub>、契曰信興淵大明神、言畢隱而不<sub>レ</sub>現、

貞觀元年(八五九)、比叡山無動寺の開基、相応和尚が生身の不動明王を拜せんとして、葛川滝で修行していた所、地主神の「信興淵大明神」が現れ、「限東比良峯、南黄之滝南行一里花折谷、西駈籠谷鎌鞍峯、北右淵瀨」を寄進し、葛川明王院の守護神になることを述べている。

平安末期以降、伊香立荘など近隣の荘郷と入会地をめくり、絶えず堺相論を起している。その際に葛川側の論拠になった高野山と丹生・高野両明神(藤井)

のが、『葛川縁起』に描かれた地主神の志古淵神から相応和尚に寄進された四至である。『葛川縁起』は鎌倉初期に慈円の時に作られたものといわれ（水野章二）「結果と領域支配―近江国葛川の村落」『日本中世の村落と荘園制』校倉書房 二〇〇〇）、相論激化の中で作成されたものと思われる。

なお近江国葛川に関する論文は多いが、特に地主神の志古淵神と荘園領主や住人との交渉を取り扱った論文は桜井好朗「山の民を守る神」（『神々の変貌―社寺縁起の世界から―』一九七六 東京大学出版会）。

(2)、辻善之助『日本仏教史』上世編（岩波書店 昭和四四）、守山聖真『文化史上より見たる弘法大師伝』第十三章「東寺の勅賜」（図書刊行会 昭和四八）

(3) 栗田寛『神祇志料附考』卷十一「日吉神社」（思文閣 昭和四六） 景山春樹『比叡山寺 その構成と諸門題』Iの四「地主の神々」（同朋舎 一九七八）

(4)、『大和史料』卷四八 奈良県 大正四年、達日出典「長谷寺にみる天神信仰」（『長谷寺史の研究』昭和五四 巖南堂書店）

(5)、新日本古典文学大系三五『今昔物語集』 岩波書店 一九九三

(6)、『空海伝説の形成と高野山―入定伝説の形成と高野山納骨の発生―』Ⅲ、「紀伊国高野山と丹生神」（同成社 一九八六）

(7)、石川真弘「裏文書『金剛峯寺建立修行縁起』」解題（天理図書館善本叢書『古楽書遺珠』八木書店 昭和四九）

(8)、卷四八「天野荘上天野村」、高野山之部卷二〇「天野社之上・下」、高野山之部総分方卷一四「天野社之部」（巖南堂書店 昭和五〇）

(9)、日本古典文学大系2 『風土記』 岩波書店 昭和三三

(10)、『太政官符案并遺告』（『弘法大師全集』第二輯 密教文化研究所 一九六五）の中に掲載される「丹生津比賣及高野大明神 仕丹生祝氏」と表題を持つ、丹生都比売神社を主祭する丹生氏の出自を記す系譜。

(11)、「ニフツヒメの信仰」(『日本民俗学』2—3 一九五四)

(12)、「丹生都比賣小考」(『東洋の思想と宗教』8 一九九一)

(13)、「高野山の行人と山岳信仰」(山岳宗教史研究叢書3『高野山と真言密教の研究』 名著出版 一九七六)

(14)、「早稲田大学出版部 昭和四五

(15)、「熊野三山前史—なぜ熊野へ人々が入っていったのか」(『金銀銅鉄伝承と歴史の道』岩田書院 一九九六)

(16)、「高野山と権門貴紳—弘法大師入定伝説を中心に—」第一章第二節「高野山納骨信仰成立前史」(岩田書院 二〇一〇)

(17)、「伊勢水銀で有名な、三重県多気郡地域では古代以来の採掘鉱跡が随所に残され、『続日本紀』、『延喜式』、『今昔物語』、『大寺要録』、『東大寺造立供養記』などの文献史料に記録が残され、朝廷への貢物、造寺造仏に多く利用されていたことが分かる。

(18)、「空海以前の丹生都比売神社」(『丹生都比売神社誌』 丹生都比売神社 一九八〇)、同(『高野山史研究』2 昭和五三)

(19)、「弘法大師空海の研究」第四部第二章「高野山の開創と丹生津比売命」(吉川弘文館 二〇〇六)

(20)、「弘法大師全集」第三輯 密教文化研究所 一九六五

(21)、「高野山と丹生社について」(『密教文化』七三 一九六五)

(22)、「鎌倉遺文」第七卷 四七〇八

(23)、「丹生広良氏文書」(『かつらぎ町史』 古代・中世史料編 かつらぎ町 一九八三)『告門』は惣神主家に保管されていたが、大正五年(大正六年とする書もある)に焼失し、現存写本は丹生相見家に伝わる応永五年(一三九八)書写のもので、和歌山県立図書館に寄託されているという。谷口正信「丹生大明神告門と天野社の関連祭祀について」(『高野山山麓天野の文化と民俗』5 二〇〇三)

高野山と丹生・高野両明神(藤井)

(24)、『告門』に載せられる巡行地は、紀伊国伊都郡奄田村石口(降臨)、川上水方の峯、十市郡(品田天皇寄進)、巨勢丹生(忌杖刺)、宇知郡布々支丹生、伊都郡町梨(御田作)、波多倍家多村字堪梨・天沼田(御田作)、忌垣豆(御碓作)、伊勢津美(太坐)、巨佐布(忌杖刺)、小都知の峯、天野原(忌杖刺)、長谷原(忌杖刺)、神野・麻国(忌杖刺)、那賀郡松門(太坐)、安梨諦の夏瀬丹生(忌杖刺)、日高郡江川丹生(忌杖刺)、那賀郡赤穂山の布気(太坐) 品田天皇赤穂村布気千代寄進)、名手村丹生屋(太坐) 品田天皇道余梨千代寄進)、伊都郡佐夜宮(太坐)、渋田村(御田作)、天野原

この『告門』は春秋の大祭に奏上される祝詞で、惣神主を継承する丹生氏の嫡流に伝えられたものである。古くは栗田寛氏が前掲書の中で、弘仁(八一〇～一三三)から嘉祥三年(八五〇)にかけて作られたものとしている。岡田莊司氏(前掲書)は現存する『告門』は後半部分に掲載された贈位階から天曆六年(九五二)～長保(九九九～一〇〇三)を上限として作られたものであろうとしている。両者とも『告門』の前半部の本文については、古色を示していると云われる。

巡行の歴史の意味については、言及している論文は少ないが、久保田収氏は「高野山における神仏習合の問題」(『神道史の研究』 皇學館大学出版部 昭和四九)で、天照大神と御杖代倭姫命の巡幸に準えている。松田寿男氏(前掲書)は「御田作」「太飯」「御酒作」など、ことごとく農事に潤色されていることから、高野山開創以後の著しい改変があったとしているが、巡行の地域で「御田作」は神領(神田)、「御杖刺」はニウスヒメの縄張り地域で丹生氏の拠点、「太坐」地域は準縄張り地域と分類している。

(25)、卷四十八 伊都郡第七 「天野莊上天野村」

(26)、前掲書

(27)、前掲書

(28)、『続風土記』卷四十七 伊都郡第六 「三谷莊三谷村」

(29)、同右

(30)、『続風土記』高野山之部 卷廿一「天野社下」

(31)、高野山之部 卷廿 「天野社上」谷口正信氏の前掲書に掲載される「江戸末期の天野社建物配置図」に丹生都比売神社境外、輪橋(太鼓橋)の東方に「荒神」を見ることできる。

(32)、(30)に同じ。

(33)、『丹生都比売神社史』コラム「天野における狩場明神」(丹生都比賣神社 平成二一)

(34)、十二王子は『続風土記』(高野山之部 卷廿「天野社上」)によれば、「惠美須」を筆頭に「皮張、皮付、土公神、大將軍、八王子、八幡、熊野、金峯、白山、住吉、信田」の十二神である。『紀伊国名所図会』三編四ノ六十四(臨川書店 平成八)

の天野社の絵図には、丹生四所明神の両脇に描かれている。「惠美須」は十二王子の筆頭として、別に社が設けられている。

(35)、卷四十七 伊都郡第六「三谷莊皮張村」

(36)、三編三ノ廿九(臨川書店 平成八)

(37)、『日本書紀』神功皇后紀撰政元年に、

爰伐新羅<sub>一</sub>之明年春二月、(中略) 皇后南詣<sub>二</sub>紀伊国<sub>一</sub>、会<sub>二</sub>太子於日高<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>讓及<sub>二</sub>群臣<sub>一</sub>、遂欲<sub>レ</sub>攻<sub>二</sub>忍熊王<sub>一</sub>、更遷<sub>二</sub>小竹宮<sub>一</sub>小竹、此云之<sub>二</sub>努<sub>一</sub>、適<sub>二</sub>是時<sub>一</sub>也、昼暗如<sub>レ</sub>夜、已經<sub>二</sub>多日<sub>一</sub>、時人曰、常夜行之也、皇后問<sub>二</sub>紀直豐耳<sub>一</sub>曰、是怪何由矣、時有<sub>二</sub>老父<sub>一</sub>曰、伝聞、如<sub>レ</sub>是怪謂<sub>二</sub>阿豆那比之罪<sub>一</sub>也、問何謂也、対曰、二社祝者共合葬歟、因以<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>推<sub>一</sub>問、巷里有<sub>二</sub>一人<sub>一</sub>曰、小竹祝与<sub>二</sub>天野祝<sub>一</sub>共為<sub>二</sub>善友<sub>一</sub>、小竹祝逢<sub>レ</sub>病而死亡之、天野祝<sub>血</sub>泣<sub>二</sub>曰<sub>一</sub>、吾也生為<sub>二</sub>交友<sub>一</sub>、何死之無<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>穴乎、則伏<sub>二</sub>屍側<sub>一</sub>而自死、仍合葬焉、蓋是之乎、乃開<sub>レ</sub>墓視之矣也、故更改<sub>二</sub>棺槨<sub>一</sub>、各異<sub>レ</sub>処以埋之、則日暉炳燦、日夜有<sub>レ</sub>別、(新訂増補国史大系『日本書紀』前篇)

高野山と丹生・高野両明神(藤井)

神功皇后が新羅遠征の帰路に忍熊王の謀叛を鎮めんがために、紀伊国小竹に遷ったところ、昼が夜のように暗くなる異変が起こる。皇后はその理由を紀直豊耳に問いただしたところ、古老の言では、小竹祝と天野祝を合葬した「阿豆那比之罪」であるという。そこで分けて埋葬したところ、その異変はなくなったという故事である。ここに出てくる「紀直豊耳」は丹生氏の流れの祖になる「別豊耳命」であり、「天野祝」は「丹生祝」であると思われるが、氏文によれば豊耳命―小牟久首―麻布良首と続き、この麻布良首が「丹生祝」の姓を賜っているので、またこの時点では「丹生祝」と云わずに、「天野祝」と称していたのかも知れない。いずれにせよ天野原での神の鎮座の古さを物語っている。

(38)、『かつらぎ町史』通史編「原始古代編」 かつらぎ町 二〇〇六

(39)、『義江彰夫「初期中世村落」(講座日本史) 2 東京大学出版会 一九七〇)

(40)、『弘法大師伝全集』第一輯 ビタカ 一九七七

『空海僧都伝』は諡号以前の三伝(他は『大僧都空海伝』、『贈大僧正空海和上伝記』)の一つである。「弘法大師」の諡号は、延喜二十一年(九二二)に醍醐天皇より賜わっているので、それ以前の成立である。『空海僧都伝』については文中に「大師自三天長九年十二月、深厭世味常務坐禪」と、「大師」の称が使われていることから西田長男氏は、延喜二十一年以降の成立であるとしている(『丹生祝氏文』と『弘法大師御遺告』と『日本神道史研究』第四卷中世編上 講談社 昭和五三)。白井優子氏は前掲書(第一部、I「史料となるおもな弘法大師空海伝」)で、諡号以前の「大師」の使用例を掲げ、ここでの「大師」は諡号ではなく尊称であると述べている。

(ふじい とよひさ・元皇學館大学院特別研究生)